

第3回

差別はもうなくなった？

監修・講師
堀内 かおる

今、「性差別」はあると思いますか？もしかしたら自分でも気づかないうちに、偏見を持って人を判断したり、「女性だから・男性だから」と性によって決めつけるような発言をしたりしているかもしれません。教育の中にも、性差別は潜在化しています。現在はすべての生徒が履修している高等学校家庭科ですが、家庭科の歴史を振り返ると、性差別と無関係ではありませんでした。また、男性と女性に二分される性のどちらでもない、あるいはどちらでもある、と自分のことをとらえている場合や、身体的な性と心の性が一致していない場合もあるなど、性のあり方は多様です。これからのよりよい社会の実現に向けて、私たちの身近なところで起きていた差別について、考えてみましょう。

今回の3ポイント 

- ① ジェンダー・ギャップ
- ② 教育とジェンダー
- ③ 当たり前を問い直す

キーワード

ジェンダー・バイアス

「男女それぞれにふさわしい色や服装がある」「男は外で働き、女は家事」など、社会的・文化的につくられ、長い間当たり前だと考えられてきた性別概念のことをジェンダーといいます。このジェンダーによって生まれる偏見をジェンダー・バイアスといいます。

ジェンダー・ギャップ指数

ジェンダーによって生まれる男女の格差や不平等のことをジェンダー・ギャップといいます。世界経済フォーラムが毎年公表しているジェンダー・ギャップ指数は、「政治参加」「経済的平等」「健康と生存」「教育機会」の4つの分野のジェンダー格差を点数化した指標です。

クォータ制

政治の場や企業などにおいて、性別や人種、宗教などを基準に、一定の比率で人数を割り当てる制度のことです。クォータ制は、さまざまな属性を持つ人々が含まれ、多様性が反映される集団や組織をつくらうとする考え方に基づいています。

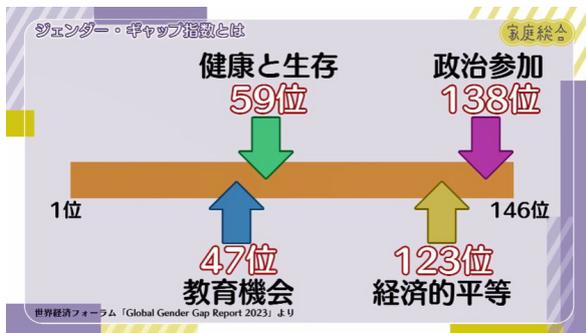
PICK UP!



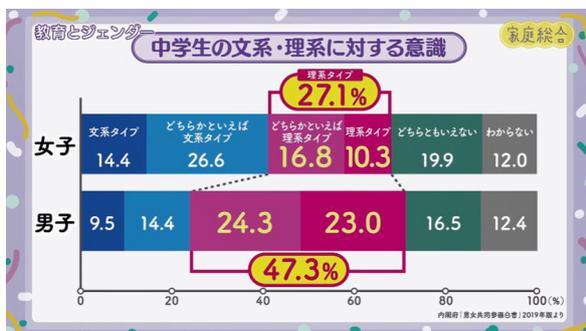
性差別って、今もあるのだろうか？
あるとしたらどのくらいの程度なのだろうか？
あなたはどう思いますか？



「女の子だから文系」「男の子は理系」と思い込んでいませんか？その進路があなたにとって本当に望ましい方向なのか、将来、自分のやりたいことを実現できる道なのか、自分の適性と合わせてよく考えてみましょう。



2023年の日本のジェンダー・ギャップ指数は、146か国中125位でした。項目別にみると、政治参加は138位、経済的平等では123位となっており、特に女性の議員や管理職についている女性が少ないことが、影響しています。



高校進学に向けて、自分のことを理系・文系のどちらだと思うか調査した結果から、女子生徒よりも男子生徒のほうが理系だと考えていることがわかります。この背景には、何があるのでしょうか。理系・文系に二分されないような学科も増えてきています。現代社会は、複雑で多様な能力が必要とされています。自分の興味・関心に基づいて、よりよい進路選択ができるとうれいですね。



コラム

今回のキーワードのひとつ、「当たり前を問い直す」という言葉は、実は、ジェンダーに関することのみならず、家庭科の本質を表す言葉だと思っています。なぜなら、家庭科という教科は、普段何気なく過ごしている毎日の生活について、改めて考えてみる教科だからです。もしかしたら生活習慣の中で、気にかけることもないくらい「当たり前」だと思っていることが、友達にとっては例外的な、特別なことかもしれません。また、私たちが健康で快適に生きていくためには、誰かが日々の生活をマネジメントして、暮らしが成り立つように整えています。だれが何を、どのように家庭生活の中で、また社会において行っているのかを可視化させ、自分はどうしているのか、何ができるのかを問いながら、家庭生活につながるさまざまな事象と向き合うきっかけとなるのが、家庭科の学習なのです。固定的なジェンダーにとらわれることなく、だれもが自分らしく生きる選択が可能となるように、これまで「当たり前」だと思い込んできたことを問い直してみるところから、新しい気づきが得られると思います。